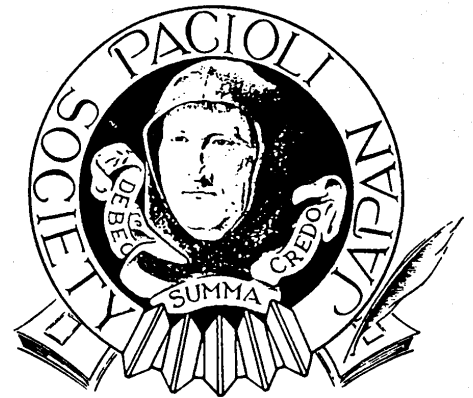


Accounting, Arithmetic & Art Journal



NO.10

The **IP**ACIOLI **S**OOCIETY **U**JAPAN

1996 . 12



第9回フォーラムのお知らせ

今回は大東文化大学の片岡泰彦先生をお迎えして「パチョーリ『簿記論』の翻訳書について」というテーマでお話しいただくことになりました。ご存じのとおり片岡先生はパチョーリ『簿記論』の翻訳者であり、その父君義雄先生とともに日本のパチョーリ研究の礎を築かれました。親子二代にわたり収集された豊富な史料や翻訳・研究の苦労など貴重なお話をいただけるものと存じます。12月21日(土)午後2時00分から拓殖大学文京キャンパス(地下鉄丸ノ内線茗荷谷下車)にて2時間半の講演と引き続いての懇親会を予定しています。興味をお持ちの方は万障繰り合わせてご参集ください。



ルカ・パチョーリをめぐる人びと

公認会計士 岩井 敏

イタリア・ルネッサンスは多彩な時代である。今日、われわれは、その時代に築かれた多くの優れた文化遺産を目にすることができるし、また秀でた先人の残した多くの業績の恩恵にも浴している。

ルネッサンスの時代に生きた数学者、ルカ・パチョーリ(1445頃～1517)の周辺も、また多くの人びとに恵まれ、それぞれの生き様は、限りなく私の興味をそそる。

去る5月18日、土曜日の午後、東京リーガ・ロイヤルホテルの一室で開かれた第8回フォーラムは、その昔ウルビーノの宮廷で開かれたサロンの楽しさを彷彿させてくれた。

与えられた時間を超過して、話は2時間弱に及んだが、茲では、その相当部分を省略して、余り知られていない事項を抽出して簡単に説明を試みたことをご諒承いただきたい。

1) ルカ・パチョーリ(Luca Pacioli)との出会い

私がルカ・パチョーリに関心をもつようになった動機は、1967年(昭和42年)9月、パリで行われた第9回国際会計士会議の帰途、表敬訪問したイタリア会計士協会より提供されたパチョーリ肖像画写真が切っ掛けである。このことは先に書いてもいるし、また当会 の世話人代表の三代川先生にも紹介していただいているので、茲ではこれ以上は觸れない。

ともあれ、パチョーリの生涯について調べ始めたのは、その年の晩秋であった。資料の蒐集が進むうちに、ジョルジョ・バザーリ(1511～1574)の論述した剽窃論が私の目に止まった。バザーリはパチョーリが己れの師ピエロ・デッラ・フランチェスカ(1415/20～1492)の死後、ピエロの学問的業績をあたかも自らの研究成果であるが如く、偽って数学書を出版した不屈きな人物であると、その著「美術家列伝」(1550, 1568)において痛烈に糾弾しているのである。

バザーリの見解は私に強烈な印象を与えるとともに、俄然パチョーリに対する私の関心をかきたてた。もし、このときバザーリの剽窃論が目に觸れなかったとしたら、私はパチョーリにさほど興味を覚えなかったかもしれない。

2) サンセポルクロ(Sansepolcro)訪問

パチョーリの生地サンセポルクロはイタリアの中部トスカーナの南部、アペニン山脈西麓のテベレ川上流の盆地に展けた古い街である。

現在では周囲を高い石壁で囲まれた旧市街と、石壁外に展けた新市街から成っている、人口約1万6千人の静かな街である。旧市街はそこに車がなければ、タイムトンネルを抜けてルネッサンスの時代に逆戻りしたかと思わせるほど随所に古いたたずまいを残している。新市街地は緑が多く、最近では新しい道路が走り、モダンなデザインの教会や近代的なマカロニ工場の建物等が目にとまる。

私のサンセポルクロ訪問は前後4回に及んでいるが、最初の訪問は1973年の5月、新緑の季節であった。片岡泰彦・中西旭両先生の紀行文を参考にした一人旅であった。美術館、図書館、パチョーリ中学校等をコマンドッチ博士の案内で見学した。

2度目の訪問は1975年10月、妻を伴いパチョーリ縁りの地を訪ね歩いた結婚20周年記念旅行の折りであった。前日ウルビーノに泊した後、タクシーを傭い、うねるような丘を幾つも越えて、最後は激しい雨の中を険しい山道を下ってサンセポルクロに入った。約80kmの道程であった。折からサンセポルクロ図書館は美術館の隣りから現在地(ヴェンジェモ・セッテブレ通り)に引越の最中であった。移転先も16世紀の由緒ある建物で、その地域も歴史保存地域に指定されているとの説明であった。

因みに元の図書館の位置は、現在では、ピエロ・デッラ・フランチェスカ没後500年を期して改修、拡張された美術館の入口および展示室の一部となっている。

3度目のサンセポルクロ訪問は、1987年8月、盛夏の季節であった。図書館の3階の一部の改修が行われていたが、この工事が終了すると1975年に移転した当初の改修計画は總て完了するとのことであった。予算の都合で随分長期間かかってしまった、とコマンドッチ館長は云われたが、日本の場合と比べて私はいろいろ考えさせられたことを記憶している。

4度目の訪問は、1994年4月「スママ」出版500年記念祭がヴェネツィアにつづきサンセポルクロで行われたときであった。片岡泰彦、三代川正秀、鈴木一道、岡本治雄各先生と共に私も妻を伴い式典に参列した。この模様については雑誌「企業会計」に片岡先生の紀行がある。その他、サンセポルクロについては今までに多くの紹介があるので重複を避けるが、一つだけパチョーリの遺骨が埋められている可能性の高い、聖ヨハネ教会は、現在では街の多目的集会場として古い建物のまま使用されていることだけを紹介しておく。

3) パチョーリ記念碑

1878年ボルゴ・サンセポルクロの人びとは、370年間忘れられていた郷土の先人ルカ・パチョーリを讃えて記念碑を作成した。この記念碑はいつの頃からか永い間、サンセポルクロ美術館の収納庫で埃にまみれていたが、12年前に元の場所、すなわち市庁舎(17世紀のラゲイ館)入口、向かって右側の外壁にはめ込まれた。

この記念碑のパチョーリを讃える文章には、友人・顧問としてレオン・バッティスタ・アルベル

ティ(1404～1472)とレオナルド・ダ・ヴィンチ(1452～1519)の名が挙げられている。しかし、何故か、そこにはパチョーリの師ピエロ・デッラ・フランチェスカの名はない。

サンセポルクロの美術館長兼図書館長のコマンドッチ博士の言によれば、記念碑作成の経緯その他、当時の記録は一切残されていないとのことである。

4) レオン・バッティスタ・アルベルティ(Leon Battista Alberti)

パチョーリ記念碑に名を記されたアルベルティはフィレンツェの銀行家の血筋を引くロレンツォ・アルベルティの次男としジェノヴァに生まれた。母はポローニャの貴族の未亡人と伝えられている。

ブルクハルトはアルベルティはなにごとにおいても少年の頃から第一人者であった、と万能の天才ぶりを讃えている。アルベルティは、先ず体操の名手であり、物理学、数学に秀いで、建築論、絵画論、彫刻論など多くの秀れた理論を著している。特に絵画論においては、数学者としてではなく、画家の視点に立って遠近法を初めて明文化し、絵画の芸術理論を展開したと云われている。アルベルティの絵画論はピエロ・デッラ・フランチェスカ、ロレンツォ・ギベルティ(1378～1455)、レオナルド・ダ・ヴィンチに影響を与えたとも伝えられている。

パチョーリは数学の師ピエロ・デッラ・フランチェスカによって、ピエロの友人アルベルティに引合わされ、ヴェネツィアでの家庭教師の職を得たと云われている。また、アルベルティが逝くなる1472年の直前の約1年間、パチョーリはローマのアルベルティ邸に住み、その薫陶を受けたとも伝えられている。

5) レオナルド・ダ・ヴィンチ(Leonardo da Vinci)

パチョーリと万能の天才、レオナルド・ダ・ヴィンチはミラノ時代、親交を結んだ間柄である。

パチョーリ研究家ピエトロ・クリヴェリィは「レオナルド・ダ・ヴィンチが友人パチョーリ修道士の肖像を画いたと信じられているが、その行方は不明である。」と述べている。

しかし、この見解の根拠は不明で、同調者は見当たらないようである。

レオナルドは1482年より、ミラノ公ルドヴィコ・スフォルツァ(1451～1508)に仕えていたが、パチョーリのスママを読んだと云われている。レオナルドの遺稿には、はっきりスママの一部が転写されていることが紹介されている。

スママ出版の翌々年、1496年よりパチョーリはミラノに住むことになる。ミラノにおけるレオナルドとの親交は、その後3年に及ぶ。

レオナルドはパチョーリから数学を学び、またパチョーリもレオナルドの助けを借りたと伝えられている。具体的には、レオナルドが設計したミラノ公の騎馬像の重量計算をパチョーリが手伝ったことや、宮廷における学術討論会で協力し合ったこと、またパチョーリのデヴィナの多面体挿図のうち数点はレオナルドが画いたことなどが挙げられている。

二人の親交は、フランス軍のミラノ侵入により1499年末、一緒にミラノを去ったことにより変わる。共にマントヴァに滞在した後の交友関係は明らかでない。

パチョーリは1517年に亡くなり、レオナルドは1519年、フランスのクルーの城で、この世を去った。

6) ピエロ・デッラ・フランチェスカ(Piero della Francesca)

パチョーリの数学の師ピエロ・デッラ・フランチェスカは同郷の人である。1415～20年頃、サンセポルクロの皮屋の息子として生まれた。

今日、サンセポルクロで発行されている「ボルゴ・サンセポルクロ」には「ピエロ・デッラ・フランチェスカの街」と副題が添えられている。ピエロはルネッサンス中期の高名な画家であり、この街が誇る巨匠である。

サンセポルクロ美術館には「ミゼリコルディアの聖母」「キリストの復活」「聖ユリアヌスの像」の有名な絵が展示されている。聖ユリアヌスの像は1954年に偶然発見されたもので、1987年の春、上野の国立西洋美術館の特別展（西洋美術展）で展示された傑作である。

ピエロの作品はウフィツィ（フィレンツェ）、ナショナルギャラリー（ロンドン）マルケ（ウルビーノ）その他の美術館や教会で鑑賞できるが、最高の作品はサンフランチェスコ教会（アレツツォ）の内陣壁画（聖十字架伝）である。ソロモン王とシバの女王の会見場面に香る気品は人の技を越えて、他に類をみないと私には思われる。ピエロは画家として優れた作品を残しているが、数学の権威として「絵画の遠近法」「五つの正多面体論」「算数法」等の理論を表している。「キリストの笞打ち」をはじめ、絵画における遠近法を完成させた芸術家と云われている。

7) ラッファエッリーノ・ダル・コッレ(Raffaellino dal Colle)記念碑



サンセポルクロ市庁舎入口の外壁には向かって右側にパチョーリ記念碑が、左側に別の人物の記念碑が掲げられている。この人物は誰か、パチョーリとの関係はあるのか、との問いが三代川先生から寄せられた。この記念碑の主はラッファエッリーノ・ダル・コッレ(1490/1500 ~1577) でパチョーリとの関係は特にない、と思われる。

記念碑には「この記念碑は1888年9月9日、ラッファエッロ・サンツィオの弟子で、なおかつジュリオ・ロマーノに匹敵するほどの人物であるラッファエッリーノ・ダル・コッレを追悼するために、彼の同郷人、彼を尊敬する人々の手によって造られた。とりわけ、職人組合がそのイニシアティブをとった。」と刻まれている。

コッレはサンセポルクロの近郊、コッレに生まれた画家である。コッレの絵はサンセポルクロ美術館に「聖母被昇天の絵」他2点が展示されている。ローマやマントバでジュリオ・ロマーノと組んで活躍した画家で、ヴァザーリの美術家列伝には採りあげられなかったが、当時の画家としては有名かつ重要な人物と云われている。

8) パチョーリ肖像画

ナポリのカポデモンテ美術館所蔵のパチョーリ肖像画は1495年にヤコポ・デ・バルバリイ（1450頃～1515頃）が画いたと云われている。

ススム出版 500年記念学会がヴェネツィアで開催された1994年4月、多くの学会参加者はヴェネツィアのグラッシイ宮に展示された、この絵を鑑賞する機会に恵まれた。

私は1975年秋、カポデモンテ美術館で初めてこの絵に接したが、そのとき机上の紙きれに画かれた制作年を表す1495のうち、末尾の5の数字は黒い染み(?)のため全く判読不可能であった。その後、1989年1月、再度訪れたカポデモンテ美術館で、私は染みの範囲が狭くなって、5の数字が小さめに書き込まれたこの絵を見て驚いた記憶がある。この部分についてはテラーも特に指摘しているように昔から不自然だった箇所と思われる。

なおこの絵は昨秋、改修が完了したカポデモンテ美術館に戻り展示されているとのことである。

9) 画家ヤコポ・デ・バルバリイ(Jacopo de Barbari)

パチョーリ肖像画の机上の紙きれには制作年の他に、Jaco Barと作者と思われる名が画かれている。それはヴェネツィア生まれの画家ヤコポ・デ・バルバリイの略と云われている。

バルバリイは銅版画が多く、わが国でも展覧会に出展されたことがある。

バルバリイの絵画は少ないが、ミュンヘン美術館には「狩りの獲物」を画いた優れた静物画がある。なお、この画では紙きれにはっきりJac de Barlbari P 1504と画かれている。

10)ウルビーノ(Urbino)侯

グイドバルド・ダ・モンテフェルトロ (Guidobaldo da Montefeltro)

アドリア海に近い丘陵に築かれた城塞都市ウルビーノは武人で文人の誉れ高い領主、フェデリコ・ダ・モンテフェルトロ(1422 ~1482) の名で知られている。

城壁で囲まれた旧市街の外には新市街が伸び、1万5千人余の住民と昼間は多くの学生が通う街である。

遠くサンセポルクロから、師ピエロに伴われてパチョーリが学んだ文庫は、チェザーレ・ボルジア(1475/76~1507) の侵略によって蔵書が散逸したと伝えられている。

モンテフェルトロの居城は現在、マルケ美術館として公開されている。この美術館には、この街生まれのラファエロ・サンツィオ(1483 ~1520) の「婦人像」やピエロの「キリストの笞打ち」「セリガリアの聖母」等の有名な絵がある。

私の手許に残る1975年2月7日の新聞の切り抜きは、2月5日の夜、マルケ美術館から上記3点の絵が盗まれたことを伝えている。泥棒は深夜、建物の外壁をよじ登り、窓を壊して侵入し、盗んだらしく、この3点は傑作中の傑作と云われ、「イタリア最大の美術品盗難」であると報じている。

私はこの年の10月、ウルビーノを訪れているが、マルケ美術館に3点の名画はなく、盗難防止のためか窓の外枠の改修工事が進められていた。しかし、幸い現在では、これらの絵は同美術館に戻り、公開展示されているとのことである。

ウルビーノと関係の深かったピエロは、フェデリコ・ダ・モンテフェルトロ夫妻の横顔肖像画を残している。衝立てにはめ込まれた夫妻の絵は、ウフィツィ美術館所蔵の傑作の一つに数えられている。フェデリコからえたピエロの知遇の程が偲ばれる作品である。

フェデリコの息子、グイドバルド・ダ・モンテフェルトロ (1472~1508) は生来、病弱の体質であった。傭兵将軍の跡継ぎながら、その努めを果たせず、チェザーレ・ボルジアとの関係等その逸話に興味は尽きない。

しかし、その反面、辺境の地ウルビーノに父フェデリコの跡を継いで、人文主義的な典雅な宮廷を作り上げた文人領主としての逸話も多く残されている。

パチョーリのスママはグイドバルドに献呈されたことはよく知られている。

通説によればパチョーリ肖像画に画かれた若者は、グイドバルドであると云われているが、グイドバルドを真正面から画いたラファエロ作と伝えられる肖像画がウフィツィ美術館にある。私はウフィツィでグイドバルドと公妃エリザベッタ (1472~1624) の肖像画が並んで展示されているのを1975年に見ている。しかし、その後、数回、訪れた同美術館では、両作品とも展示から外され鑑賞することはできないでいる。

11) ジョルジョ・ヴァザーリ(Giorgio Vasari)の美術家列伝

アレツォ生まれのジョルジョ・ヴァザーリは美術家列伝の著者として知られている。パチョーリ剽窃論の著者である。

江村稔先生は今から40余年前、「複式簿記生成発達史論」において、剽窃論を紹介、詳述されている。戦争直後の万事環境の厳しい時代における先生の優れた、ご研究には心からの尊敬の念を禁じえない。

パチョーリ剽窃論を唱えたヴァザーリの論説は屢々、信をおき難いと云われているが、彼がルネッサンス史上、大きな功績を残したことは否めない。

ヴァザーリが美術家列伝を世に出したのは1550年と1568年のことである。いずれにしてもパチョーリが逝去して、すでに永い年月が経っている。彼は個人を相手に、美術家列伝「ピエロ・デッラ・フランチェスカ」の冒頭及び中間の2カ所で、パチョーリの学者としての行為に痛烈な批判を浴びせている。

かつての日、私に衝撃を与えたその箇所は、今日、なお胸を刺す。茲に紹介して擱筆としたい。

……この男は傲慢不遜にも、その恩師であるピエロの名声をもみ消し、師個人のものであるはずの榮譽を篡奪しようとし、この好々爺の業績をことごとく自分自身の名で、つまりボルゴ生まれのフラ・ルカの名で出版したのである。

……ボルゴ生まれのルカ先生という聖フランチェスコ派の僧は、正多面体を幾何学的に扱った手稿を残しているが、もとはといえばピエロの門弟である。

ピエロが年老いて他界したとき、多くの書物が残された。このルカ先生は師の死後、自分の手に入ったものを篡奪して、彼自身の書物として出版した。……

(裾分一弘教授訳、美術出版社編による)



第7回会計史家国際会議を終えて会計史家国際会議 (The World Congress of Accounting Historians) は1996年8月11～13日にカナダのオンタリオ州キングストン市にあるクイーンズ大学で開催されました。トロントから東へ180マイル、オンタリオ湖畔に面したこの観光地に世界各地から 150余名が集いました。日本からは報告者の岡野浩先生 (「ハリソン・エマーソンの標準原価再考…彼の批判的原価の観点」) をはじめ8名が参加いたしました。詳しくは片岡泰彦稿「第七回会計史世界会議に参加して」雑誌『会計』Vol.150, No.5. (1996.11)を参照されたい。西暦2000年 (7月の第四週目) に開催される第8回会議はスペイン・マドリッドに決まりました。8WCAH (The World Congress of Accounting Historians) のロゴ・マークがこの会議で配布されましたのでご紹介致します。



ホリデー・インの廊下で会談するD.シュナイダー(左),R.マテッシ(中),岡本治雄(右)

クイーンズ大学での国際会議は8月11日夕刻からホリデー・インの歓迎パーティーに始まった。このレセプションの出席者のなかに、マテッシ (R.Mattessich) を始めマクビー (R.Macve)やシュナイダー (D.Schneider)など片岡先生や岡本先生旧知の方々がおられました。

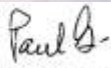
翌日から会場を大学の教室に移し活発な討議が始まりました。12日は大学が用意したバンケット・ルームでの豪華な晩餐会が催されましたが、飲酒にうるさい国だけあって、一杯目のワインはフリー、しかし、二杯目からはチャージされるのことに閉口しました。最後に当日誕生日を迎えたガーナー (Paul Garner) にお祝いの歌を全員で合唱し終幕しました。筆者はレセプションの折

りにvan Seventerからガーナー氏の紹介を受けました。そして帰国後、9月12日付の氏からの日本の友人を懐かしむお便りをいただいた（下記サイン）のも束の間、10月16日に逝去されたという訃報に接しました。車椅子に乗って出席され、岡野氏の発表に精力的にアドバイスをされていた姿が



とても印象的でした。心か
らご冥福を祈ります。

レプションでのバン・セブンスター(左)とガ
ナー(右)

Dr. Paul Garner, C. P. A. 
Paul Garner
Dean Emeritus

私ども日本パチョーリ協会はルカ・パチョーリの功績を偲び会計史、数学史、美術史などに興味を持たれる方々の研究と親睦を目的とする会合です。興味のある方は、世話人にお声をかけてくださればご案内申し上げます。

世話人：岡本治雄・鈴木一道・佐々木重人・三代川正秀
監 事：種田勝正・松井隆幸

The **P**ACIOLI **S**OCIETY **J**APAN

日本パチョーリ協会 〒112-8585 東京都文京区小日向3-4-14 拓殖大学 商学部 三代川 研究室 TEL.03-3955-8783
The Institute for Management and Accounting/Takushoku Univ. Miyokawa Office